

漢方による心不全治療に木防已湯（もくぼういとう）

宮城利府掖済会病院

副院長（内科） 片寄 大

心不全と利尿剤

慢性心不全の患者さんが風邪などで調子が悪くなると、全身にむくみが見られます。こんな時は、通常尿を増やしてむくみをとる利尿剤という薬が使われますが、利尿剤は無理やり体から水を奪う薬なので、尿酸値が上がったり、血清カリウム値が下がったり、腎機能が悪化したりと、いろいろからだに悪いことがおきがちです。こんな時には木防已湯はいかがでしょうか。

むくみを取る

木防已湯は、むくみを取る成分に加え、体力を補う、血行を促進する成分などの助けを借りて体全体のバランスを取りながらむくみを取っていきます。その効き方を漢方の四大古典の一つ金匱要略きんきんきょうりやくでみていきましょう。

金匱要略には『膈間支飲かくかんしいん（胸に水がたまる）、その人喘満ぜんまん（心臓喘息）、心下痞堅しんかひけん（みぞおちが硬く緊張している）、面色黧黒れいこく（チアノーゼ）、その脈沈緊みやくしんけん（沈んで緊張感のある脈）、之を得て数十日、医これを吐下して癒えざるは木防已湯これを主つかさどる』とあります。

木防已湯が体のバランスをとりつつ、かつ急性心不全に切れ味よく効く様子が見がえやすい（それにしても2000年も前に著された漢方の古典が、急性左心不全の徴候を的確に記述していることには驚かされるばかりです）。

効能いろいろ

さらには、木防已湯には隠し味『石膏せつこう』が含まれています。その効能については、古来様々な考え方がいわれてきました。

石膏が体の中に溜まった悪い物質（漢方では痰^{たん}といいます）から生じる熱を抑えるというのは中国医学の考え方ですが、現代の医学ではむくんでいる肺に菌が付き肺炎が起こるのを抑えると解釈できるでしょう。また日本漢方後世派などでは、石膏が体の水^{ぼうこう}を膀胱に運ぶという考え方があり、石膏に肺のむくみ自体をとる作用が期待できます。石膏が喉が乾く症状をとるとするのは日本漢方古方派の考え方ですが、むくみを取っている最中の心不全の患者さん、あるいは肺炎で発熱している心不全の患者さん^あにありがちな喉の乾きの改善も期待できるでしょう。

石膏には心臓を休ませる作用、心筋を保護する作用があるのではないかとするのは下関にある原田東邦クリニック院長、原田康平先生の考え方ですが、木防已湯は心不全治療において HANP やβ遮断薬と同様の心保護剤として位置づけができるかもしれません。

そのほか、石膏には鎮咳作用^{ちんがい}があり、心臓喘息や肺炎などに伴う咳嗽^{がいそう}軽減にも有効でしょう。総じて、木防已湯は感冒などの感染症により慢性心不全が悪化するのを予防することや、急性心不全発症初期の段階での治療などに効き、かつ患者様の QOL（生活の質）まで改善するという「おまけ」まで期待できるのではないかと考えられます。

不適當な場合も

注意点ですが、生命力が低下している患者さんや冷え性の患者さんには木防已湯よりは体を温める成分（附子^{ぶし}）が含まれる真武湯^{しんぶとう}、牛車腎気丸^{ごしゃじんきがん}などの薬がおすすめです。生命力が低下している患者さんのむくみには、附子を配合した方がよいというのは江戸時代の名医、和田東郭^{わだとうかく}の教えです。

また、木防已湯には心拍数を少し上げる作用が報告されており、頻脈の患者さんには使用しない方が無難でしょう。

それから慢性心不全の治療においては、ACE 阻害剤、β遮断薬、ARB（アンギオテンシンⅡ受容体拮抗剤^{きつこう}）など、大規模臨床試験で有効性が確立されている薬剤があり、木防已湯はこれらの薬剤との併用が原則かと思われま

住 所 〒981-0103 宮城県宮城郡利府町森郷字新太子堂5 1

TEL 0 2 2 (7 6 7) 2 1 5 1

FAX 0 2 2 (7 6 7) 2 1 5 6

H P <http://www.h2.dion.ne.jp/~mrekisai/>